

を示し、その後は次第に正常に復する。硬膜下腔にバルーンを挿入し、1週間後に3~4mlの空気を注入した例および脳実質内に静脈血2~5mlを注入した例では著明な変化はみられず、この程度の障害では左右差も認められなかった。以上のことより末梢循環中枢のある脳幹部まで強い障害が及ばなければ、末梢循環はあまり影響を受けないものと考えられる。

*

126. 腹膜の機能に関する研究

—腹膜のナトリウム透過性について—

高安久雄 小川秋実 中内浩二

上野 精 仁藤 博 ○梅田 隆

(東京大学泌尿器科)

泌尿器科入院中の成人患者3名について、ペニソリタ一液1lに200 μ cの²⁴NaClを添加したものを腹腔内に注

入留置し、血漿および灌流液の radioactivity の時間的変化を検討した。灌流液は2個の指数函数と1個の常数の和よりなる函数で示され、血漿は飽和曲線で近似された。この実験式に基づき、灌流液と腹膜外の細胞外液とのNaの交換量を計算すると、毎分5.82mEq, 4.10mEq, 4.82mEqであった。また灌流液と血漿とのNaの交換量は、毎分0.79mEq, 0.84mEq, 0.57mEqであった。

灌流液と細胞外液とに濃度勾配のほとんどないNaイオンが、腹膜を介して予想外に多量移動している。

質問：青木 広(東京医科大学外科) 注入する液体の量の差による変化はあったかどうか？

答：梅田 隆 腹膜灌流液は1lについてのみ検討した。

*

*

*

*

*

*

*

*

*